

連載特集 - 衛星余話 (10) -



平尾 耕三

株式会社東芝情報・社会システム社
本誌編集委員

ロシアの宇宙ステーションミールが15年間の働きを終えて、3月23日南太平洋に火の玉となって落下した。それまで、ミールが日本上空を通過することから国内に落下する可能もあり、2ヶ月間にわたり日本国内ではセンセーショナルな形でニュースに取り上げられることが多く最後までハラハラドキドキさせられた。報道もそれに調子を合わせていた嫌いがある。ミールは1986年に打ち上げられ、104名もの多くの宇宙飛行士を長期間滞在させ、その中には日本人の秋山さんも1人として数えられている。ミールそのものは当初の予定通り設定していた地点に落下させたロシアの技

術には感嘆するするとともに素晴らしいものであると思う。しかし、それ以前に考えさせられる事項が多かったと思う。それに関連して間近では、昨年3月18日に当初鳴り物入りで地球上のどこからでも電話が出来るとのことで開発されたイリジウム衛星66個が停波され無用の長物になった。これらの人工衛星も将来は地上に落下してくる宇宙のゴミになっている。大半は大気中で燃え尽きてしまうことになると思うが、万が一にも落下の可能性がある。現在イリジウムの如く宇宙で無用の長物になったゴミすなわちデブリと呼ばれるものが数千個漂っている。小生も係わり宇宙に打ち上げられ現在は利用されていないETS-、みどり等多数の人工衛星が宇宙のゴミとして漂っている。今後もロケット、静止衛星、周回衛星問わず更に大型の宇宙ステーションが宇宙のゴミになることは間違いない。

宇宙のゴミは宇宙に滞在する人の取っては非常に危険な凶器である。人工衛星など宇宙に打ち上げられるものはそのことを考慮して設計することが必須ではないだろうか？

日常使用する家電製品もこの4月からリサイクル法で廃棄に費用がかかるようになった。事前によく考えなければならないと思うのこの頃である。